

女子大学大学院国際社会システム研究科・  
現代社会学部現代こども学科 開設記念講演会

# 私が会った世界のこどもたち

— ユニセフ親善大使としての21年間 —

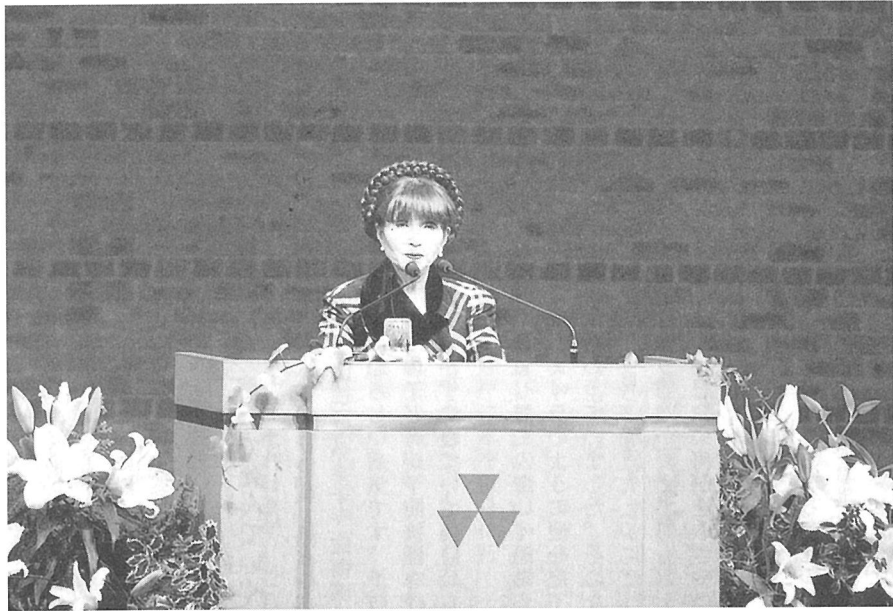
ユニセフ親善大使  
黒柳 徹子

私は21年前にユニセフ親善大使に任命されて以来、毎年、世界でもっとも助けを必要としている国を訪ねています。ユニセフ親善大使の仕事の一つめは、テレビや新聞、雑誌などを通して、子どもたちの直面する問題を皆さんに知っていただくこと。二つめは、子どもたちと話したり、遊んだりして親善を深めること。そして、もうひとつはその国の大統領など政府首脳と会って、子どものことを優先的に考えてくださいます、とお願ひすることです。

## ユニセフ親善大使として初めてアフリカへ

初めて親善大使として行った国はアフリカのタンザニアで

した。当時、深刻な干ばつで、一日に600人近くの子どもが亡くなっていました。アフリカといえば野生の動物が多くいるという印象があります。そこで私たちはある小学校へ行き、「好きな動物の絵を描いてください」と、子どもたちにクレヨンと画用紙を渡したのですが、30人ほどいた子どものうち、動物を描いたのはたったの二人。一人はハエ、もう一人は鳥のようなものを描きました。日本ではどんな子でも象もシマウマもライオンも描けるでしょう。アフリカには53の国がありますが、ほとんどが長い間、ヨーロッパの植民地でした。貧しい国が多く、動物園なんかありません。また、テレビも絵本もないので、子どもたちは、日本の子どものように



講演をする黒柳徹子さん

にめずらしい動物を見ることがありません。そんなことも行くまで知らなかったなんてと、大きなショックを受けました。3年も雨が降らない村では、穀物も育ちません。子どもたちはやせ細り、飢えの恐ろしさを思い知らされました。村には、裸同然の姿で冷たい地面をズルズルとはいく回っている6歳の男の子がいました。母親は食べ物が見つかったために母乳が出ず、お腹が空いて泣くので水を与えていたようです。そのために子どもは栄養失調になり、脳の成長が止まってしまいました。私はその子の手を取って「ごめんね。何もしてあげられなくて」と、話しかけました。すると、その子が泥をすくって、そっと私の手の中に入れてくれたのです。言葉は通じなくても本能的に、優しい言葉をかけてくれる人ということがわかったのでしょうか。何かお礼をしたいと思います。人間はなんでもすこいのだろうと、驚きました。それが、この仕事をずっと続けていこうと思った、最初の出来事でした。

村を出るとき村長さんが私に「大人とは違って子どもは何も言わず、ただ周りの大人を信頼して黙って死んでいくんです。どうか、そのことを忘れないでください」とおっしゃいました。その言葉は、21年経った今も心の奥に焼きついていきます。

そういえば、村々を回っていてとても興味深いことがありました。どこへ行っても村長さんが子どもたちを集めて現地の言葉で私のことを説明してくださるんですが、いつもその中に「トット」という言葉が出てきます。最初は、タンザニ

アの村長さんも私の書いた「窓ぎわのトットちゃん」の英語版を読んでくれているのかしらと思つたくらいです。聞いてみると、「トット」とはスワヒリ語で「子ども」の意味だそうです。私は生まれたときから子どものために働くようになっていたのかなあと、そのときは不思議な縁を感じて、とても嬉しく思いました。

### 子どもたちは貧しさのなか、黙って死んでいく

インドでは、毎年、約250万人の子どものが、飢えや伝染病で5歳の誕生日を迎える前に亡くなっています。破傷風は、子どもの死因のなかでも、とくに恐ろしい病気です。予防接種で防ぐことができますが、多くの子どもが予防接種を受けられないうえ、土のうえに何も敷かず寝ていて傷口から感染するので。

高熱が続き、最後には全身が硬直して死んでいく恐ろしい病気です。私が訪れた病院には、ミイラのように瘦せた子どもたちが苦しうにベッドに横たわっていました。そのなかの10歳ぐらいの男の子が私をじつと見ています。「がんばってね」と声をかけると、その子はもう筋肉が衰えて何も言えないのに、喉の奥でうめくように一生懸命に何かをささやいています。看護婦さんに聞くと、男の子は「あなたの幸せを祈っています」と、言つてたそうです。苦しいでしょう、辛いでしょ。なのに、私のことを気づかしてくれる。たつた一本の予防接種で助かる命。日本ではわずかなお金です。でも、それすら受けることのできない貧しさ。シーンと静まり返つ

親にはもうわからないのです。

母子感染でHIV/エイズに罹つた赤ちゃんにもたくさん会いました。生まれて3〜4カ月だというのに、赤ちゃんたちは乾いた目でじつと私を見つめています。その目はまるで「どうしてこんなことになつちやつたんでしょね」と言つてするような気がしてたまりませんでした。

苦しくて辛くても子どもたちは誰かのせいでこうなつた、なんて言わないんです。私はたくさんさんの難民キャンプを訪れましたが、ただの一人も自殺をした子どもはいないそうです。どんな状況であれ、子どもは生きていこうとしています。飢えていても、ご飯を食べる時間もないほどの厳しい労働を強いられていても、何キロも離れた井戸に水を汲みに行く子どもたちも、誰一人、泣き言は言いません。こうして世界でも、もつとも過酷な状況にある国を訪れていると、子どもたちに教えられることが、たくさんあります。

今、ここにいる皆さんの中には自分は何ができるのかと、考えている方もいらっしゃるでしょう。寄付も大切ですが、それよりもっと重要なことがあります。それはまず、ご自分の身の回りで起きていることに関心を持つということです。そして次に何ができるかを考えてみてください。アフリカにまで行かなくても、周りの人たちに親切にすることでもいいんです。何かできることはあるはずですよ。

私が高校生のときに覚えたフランスの詩があります。「人間生まれてきたことは、人のためにちよつと何か、すること」という、短いものです。人のために、ちよつと何かする、そ

た病院にはときおり、「きやーっ」という女の人の悲鳴のような泣き声が響きます。それは子どもを亡くした母親の悲しい叫びでした。

内戦が続くと国は疲弊し、子どもたちは飢え、病気になって死んでいきます。エチオピア南部のドロオドという村を訪ねました。10メートルぐらいの幅の川の向こうはソマリアで、激しい戦闘が続いていました。ソマリアからは、難民が川を筏に乗ってドロオドに逃げてきます。子どもたちは痩せこけ、ほとんど骸骨が歩いているような状態です。栄養失調で髪の毛も抜け、女の子が男の子ともわかりません。身体は5センチほどです。それでも大人について必死で歩いてきます。ドロオドに着いても食べるものもなく、川の不衛生な泥水をすくって飲むために、お腹をこわして死んでしまう子どもたちもいます。

### どんな状況でも生きようとする子どもたち

ちようど、テントのところで子どもたちが長い行列を作つていました。毎朝、子どもの体重を量り、平均体重の70%以下の子どもだけを選んで食べ物を与えているのです。食べ物といつても、小麦粉にトウモロコシの粉、砂糖などを混ぜたものに水を加えて煮た、ドロドロのお粥です。熱い風が吹きすさぶ砂漠のなかで、行儀良く自分の体重測定のを待つ子どもたち。その横には、小さな盛り土が延々と続いています。そこには、栄養失調で亡くなった子どもが埋められています。土の山のどこに自分の子どもが埋葬されているか、母

れが何であるかを考えることも、ときには必要ではないでしょうか…。

（講演会は2004年12月1日、女子大学主催・朝日新聞社の後援により、大学寒梅館ハーディーホールで開催された。聴講者は、希望者約3千人の中から抽選で選ばれた800人）

## 講演会を終えて

女子大学現代社会学部長  
河野 健 男

予想に違わぬ感動的な講演内容でした。世界の紛争地域には、こどもや女性が犠牲者として必ず存在していることが平易な語り口で紹介されました。大社会が引き起こした戦争や紛争が、どれだけこどもたちの現在や未来を脅かしているかを、時には嗚咽や怒りを込めて淡々と語られ、その意味するところは聞く者の心に直截に伝わりました。特に、悲惨な境遇にあるこどもたちが、「そうなた原因を他者ではなく自分にあると思つていい。」という指摘が参加者全員の共感を呼びました。

平和・人権という本学の教育理念に通底するテーマの語り部として最適な講演会でありました。